

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

自然は教材の宝庫／幼稚園どんぐりころころ

子どもたちは、木の実・落ち葉・花びら、などなど自然物を見付け、取ったり拾ったり集めたりすることが大好きです。このような姿は、興味をもってよく観たり、不思議に感じたり、表現したり…。さらに探したり試したりと、多様な体験に繋がります。

日常の保育の中で子どもたちの「拾ったり取ったりする姿」と「科学する心」の繋がりに注目し、長期に亘り記録を積み重ねている園の「子どもたちの豆との関わり」の事例をご紹介します。



● 「これも豆、あれも豆…」／2～3歳児

畑や散歩で、様々なモノを拾ったり取ったりすることを毎日のように楽しんでいる子どもたちの生活の中から、豆に関わる姿を抜粋。

✦ 4月

- 畑で育てていたサヤエンドウを取る。両手を使って取ることを教えると、押さえる手と豆を掴んで引っ張る手とをだんだん上手に使うようになった。3歳児4人で小さなレジ袋にいっぱい取る。皆で分けて家に持ち帰った。5月末まで毎週月曜日に畑に行く度に収穫することができた。



✦ 5月中旬

- 毎日のように歩く道に1本だけカラスノエンドウが出ているのを保育者が見付けた。保育者が取ると2歳児Kちゃんが真似して取る。早速開けて見ると、小さな豆が入っていた。
- 同じ日の帰り道、昨年カラスノエンドウがたくさんあった場所に行ってみようと、普段通らない道を歩いていると、その途中の空き地にたくさんのカラスノエンドウを見付けて、30分以上、豆を取って遊んだ。
- 緑色だけでなく、黒い豆もあり、開けてみると緑色のとは違った様子の豆が入っていた。ポケットに入れたり容器に集めたり、夢中で豆を取って遊んだ。
- この日から3日続けてカラスノエンドウを取って遊んだのだが、黒いカラスノエンドウの中にはちょっと触れただけでパチッと音を立ててはじけるものがあったり、豆を入れたカップを動かすといい音が出たり発見があった。空き地のあちこちにカラスノエンドウはたくさんあり、どんなに取っても飽きることはなかった。保育者も子どもと一緒に豆取りを楽しんだ。



✦ 6月初旬

- 3歳児は4月はサヤエンドウ、5月はカラスノエンドウと、豆を取って食べたり遊んだりなど、豆に親しみがあるので、他にも豆を育ててみようと考えた。保育者が、シロナタマメに興味があったことと、あの姿形は子どもにも魅力的だと考え、シロナタマメを育てるとにした。
- 実際に種を見せると、その大きさに子どもは心惹かれた様子。様々な種まきをしているので、もちろんこの種も上手に扱ったが、何よりも大きくてよく見えるのがよかった。1週間で発芽し始める様子がとてもよく見えた。
- 庭のプランターのスイートピーのさやを見付けて取る。3歳児hちゃんは、早速さやを開き豆が並んでいる様子を見て「大きいのと小さいのだ」と保育者に話して見せる。「大きい、小さい、大きいって並んでいるね」と保育者は見た通りに話す。
- スイートピーのさやは何度か取っているが、こんな風に、開いて丁寧にみることはこの時が初めてだった。



✦ 7月

- シロナタマメが、勢いよく生長し、蔓が支柱に絡んでトンネルになった。花も咲き初めたことを3歳児が確認した。

✦ 9月

- 3歳児は、夏休みが明けて畑に行くと、大きくなったナタマメを見つけた。
- 子どもたちが、どうしても取りたいと言うので1個だけ取ることにした。早速開けようとするが、硬くて爪を立ててもさやは壊れない。「爪をけずろう!」とか「包丁で切ろう!」「茹でて柔らかくしよう!」等と言いだしたので、どんぐりの家に帰って開けてみることにした。
- 保育者が開けて見ると、中には白くて大きな豆が入っていた。さやの中はフワフワ柔らかい物で覆われていた。一人ずつ触って確認。
- 今度は、豆を茹でて食べようと言い出すので、たった6個を茹でてみた。白い薄皮を取ると枝豆のような色の豆が出てきた。
- まず保育者が味見をして子どもたちも食べる。「甘い」と言う。保育者も含めてこの日は5人。豆が1個残るはずが、何度見ても6個の薄皮だけ。なんとだれも知らないうちにKちゃんが2個目を食べていた。「おいしい」と思ったのだろう。来週取ったら持って帰ることになった。
- 秋冬の畑の計画もあり、ナタマメは全部収穫した。並べて数えると34個。床の上に並べて形を作り始めた3歳児Tちゃん、Hちゃん。最後は大好きな電車レッドアローになり、ナタ豆のマイクでアナウンス。
- 翌日は、かごに豆を入れておくと、3歳児はうさぎの耳にしたりベルトにしたりして遊び出し、2歳児Kちゃんは「なあに?」と保育者に尋ねた。「豆だよ」と答える。
- Kちゃんが、さやを開けようとする。Kちゃんはカラスノエンドウを取って開いて豆を取り出して遊んだことがある。しかし、なかなか開かない。折ることを保育者が促すと折ろうとするがなかなか折れない。3歳児に手伝ってもらってようやく折れて、豆を開けることができた。Kちゃんはようやく取りだした4個の豆を大事に袋に入れて「お家で食べる」と言って持って帰った。
- シロナタマメを収穫してから2、3日、並べたり開けようとしたり、工作の材料にしたりして豆で自由に遊んだ。



✦ 考察

● 「目に入る」「見る」「探す」

● 予想通り・確認・発見・意外性

● 気付く・見分ける

拾ったり取ったりすることの延長線上に見ることが存在する。拾ったり取ったりすることの始まりは、色が鮮やかであること、保育者や友達がしていることの真似で、見るというよりは目に入ったモノであるようだ。一度でも拾ったり取ったりすると、意識的に見る、探すようになる。

一度拾ったり取ったりしたものは、同じ場所或いは違った場所でも拾ったり取ったりする。いつもと違う場所にも馴染みのモノを見付けて拾う。逆にあるはずのものが無いということもある。

拾ったり取ったりするために見るのか、見ることで拾いたくなるのか。いずれにしても、子どもは自分の周りのものをよく見るようになる。よく見ることで、気付いたり見分けたりする。

● 行為の連鎖

子どもは拾ったり取ったりすることを毎日繰り返している。繰り返すうちに、別の行為が生まれる。例えば、匂いをかぐ。拾ったものを踏みつけたり、壊したり分解したりする。一つの行為が次の行為を生んでいるようにも見える。

● ごっこ遊びのはじまり

特に3歳児は、拾ったり取ったりしたものを、その時すぐにではなく別の場面で使って遊ぶようになる。それと同時に、使いたい用途に合わせて拾ったり取ったりすることもある。

● 意外性・納得

子どもたちはいろいろな豆と出会った。どれも豆であると受け入れていた。いろいろあることをどうして受け入れられたか考えると、どんな豆でも手に入れると開いて中身を確認したり、自由に使って遊んだりして自分で確かめてその豆を分かっていたからではないか。単純に面白いからいくつもいくつも豆を取ってはさやを開いて遊ぶこともあり、硬くて思うように開けられないという「意外性」、やっぱり豆はおいしかったという「納得」もあった。